

留学生の介護福祉士国家試験合格率向上に向けて

— パターン化させた暗記対策が及ぼす効果 —

細 野 真 代¹⁾ 三 村 美 緒²⁾

¹⁾ 日本福祉教育専門学校 介護福祉学科

²⁾ 日本福祉教育専門学校 教学マネジメント課

Towards improving the national exam pass rate for international students studying to become care workers

— The effects of patterned memorization strategies —

Hosono Mayo¹⁾ Mimura Mio²⁾

¹⁾ Department of Care Welfare, Japan Welfare Education College

²⁾ Academic Management Division, Japan Welfare Education College

Abstract : This study addresses the low passing rate of international students on the Certified Care Worker National Examination, aiming to enhance the professional skills of the growing number of foreign caregivers in Japan. We designed and implemented a short-term, memory-focused learning support program for international students, particularly those who had not yet passed the Japanese Language Proficiency Test (JLPT) N2.

The program, which ran for four months starting in October 2024, was based on learning science principles such as active recall and the protégé effect. We provided supplementary classes to students at our institution who had not met a specific benchmark on a practice exam.

The results of this study indicate that, rather than focusing exclusively on an international student's Japanese proficiency, it is essential to adopt scientifically grounded teaching methods that address individual learning needs in order to improve international students' pass rates.

These findings suggest that simply focusing on a student's Japanese language level is insufficient. Instead, the introduction of evidence-based teaching methods tailored to individual learning needs is crucial for improving the passing rate for international students.

Key Words : international students, the Certified Care Worker National Examination, Japanese language level, output, learning effectiveness

抄録 : 本研究は、増加する外国人介護人材の専門性向上を目的とし、留学生の介護福祉士国家試験合格率の低迷という課題に取り組むものである。特に、日本語能力試験 N2 未取得者を中心とした留学生に対し、短期間で効果が期待できる暗記中心の学習支援プログラムを設計・実施し、その有効性を検証した。対象は、本校の留学生のうち模擬試験で特定の基準に満たなかった者である。2024年10月から4ヶ月間、アクティブリコールやプロテジェ効果などの学習科学の知見を取り入れた補足授業を実施した。その結果、参加者の国家試験平均点は模擬試験から16点上昇し、半数近くが合格に至った。アンケート調査からは、学生主体の能動的な学習（アウトプット）や、定着度を確認する小テストが学習効果とモチベーション維持に寄与したことが示唆された。本研究の結果は、留学生の日本語レベルのみを問題とするのではなく、個々の学習状況に合わせた科学的根拠に基づく指導法を導入することが、合格率向上に不可欠であることを示している。

キーワード : 留学生、介護福祉士国家試験、日本語レベル、アウトプット、学習効果

1 序論

2024年に公表された第9期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数の推計によれば、2040年度までに新たに約57万人の介護職員が必要であるとされている。また、厚生労働省でも「複雑化・多様化する介護ニーズへの対応が求められており、高い専門性を有する介護人材の確保育成が喫緊の課題となっているところ、介護福祉士国家試験については、その重要性がこれまで以上に増しているが、国家試験を受験する者は、第31回試験以降、減少傾向である」と問題提起している。

その背景には、外国人受験者の合格率の低さが一因として存在すると考えられる。実際、厚生労働省の発表によると第37回の介護福祉士国家試験は受験者数7万5387人、合格者数5万8992人であり、合格率78.3%であったが、これは日本人受験者の高い合格率に支えられており、留学生を含む外国人受験者の合格率はEPA、技能実習、特定技能、留学生いずれの在留資格においても40%を超えておらず、著しく低い水準にあることが推察される。多くの留学生が自分に合った学習方法を見いだせず、十分な準備ができないまま本試験をむかえる例も少なくないことが窺える。

一方で、日本介護福祉士会の調査では2017年9月に施行された在留資格「介護」の在留者数は現時点で10468名（2024年6月末）と年々増えてはいるが、それでも介護に従事する外国人のビザとしては特定技能が21915名、技能実習が26000人と8割を占めている。少子高齢社会の日本における今後のニーズを踏まえると、より専門性の高い知識を持つ在留資格「介護」の外国人在留者数を増やすことは急務であり、そのためには外国人の介護福祉士国家試験合格のためのカリキュラム確立が不可欠である。現時点でこのテーマに焦点を当てた研究はまだ十分とは言えず、本研究は、その実践的な知見を提供するのを目的とする。

本研究を行うにあたり、先行研究として「語学力と専門学習の関係」「専門分野における日本語教育」「効果的な指導法」の3つの観点から下記の論文を参考にした。

「語学力と専門学習の関係」について、強い相関があることが多くの研究で示されている。

Ellen M. Gajewski (2021) によると、国内の第二言語としての英語を学ぶ学生の英語力の入学要件と看護プログラムでの成績との関係を明らかにする中で、学業成績の低さは英語力の入学基準と相関しているということが示された。

Amanda Muller (2011) によると、国際看護学生の英語ニーズへの対応において、語彙学習が知識の受容に重要な中核的な言語活動であり、教室や臨床実習の場での学生の活動準備に不可欠であるということが示された。

Amanda Muller, Michael Daller (2018) によると、2つの言語テスト（IELTS と C テスト）を用いた留学生の臨床成績と学業成績の予測：相関研究において、学術的および臨床的テーマの両方において、両方の英語テストが成績と優位な相関関係にあることが分かったが、それぞれの相関関係には違いがあるということが明らかになった。

Richard L. Light, Ming Xu, Jonathan Mossop (1987) によると留学生の英語力と学業成績において TOEFL のスコアは成績平均点で測る学業成績の有効な予測因子でないことが示された。

Yenna Salamonson, Bronwyn Everett, Jane Koch, Sharon Andrew, Patricia M. Davidson (2007) によると英語を第二言語とする看護学生の学業成績は、英語への文化適応によって予測されるにおいて、ELAS のスコアと成績の関係を調べたところ、ELAS のスコアが最も低い学生は科目成績の平均も最も低く、ESL 学生における英語文化適応の特定をより重視する必要があることが立証された。

Olson. Mary Angela (2012) によると、第二言語として英語を学ぶ（ESL）看護学生の成功：文献の批評的レビューの中で、ESL 看護学生が直面する最大の障壁は言語の壁であると特定された。

一方、日本で行われている先行研究でも「専門分野における日本語教育」について同様の研究結果がでている。

黄・金丸 (2023) によると、介護分野における専門用語の平易化に向けた語彙リストの構築において、介護分野において社会になじみの薄い専門用語を、平易な日本語という考えに基づいて誰もが理解できる言葉へと言い換える語彙リストが構築された。

大谷（2019）によると、EPA 看護師候補者のためのオンライン漢字語彙教材の開発において、基本的な医学術語の多くは漢字熟語から構成されていて、その構成基盤となっている二漢字語の一部が高い造語力をもっているため、学習者がそのような漢字熟語を学ぶことによって学習効率が高まるという研究が存在すると明らかになった。

Phan Thi My Loan ら（2023）によると、介護福祉士国家試験出現漢字語彙のなかの漢越語に関する基礎調査では、「非漢字圏」の候補者にとっては介護福祉士国家試験を受ける上で漢字が大きな障壁になるとの予測のもと、国家試験の中の漢字語彙について調査研究が行われてきたことを受け、漢越語が分類された。

これらの先行文献から、専門分野の学習には、一般的な語学力とは異なる特定の言語スキルが求められる可能性が示唆されており、かつ非漢字圏の学習者にとって言語的障壁をいかに軽減するかが重要な課題であることが示されている。

また、「効果的な指導法」においては、学習者のニーズに合わせ、学習者本人の自律的な学習を支援する指導法が有効であることが多くの研究で示されている。

Anson C. Y. Tang, Nick Wong, Thomas K. S. Wong（2015）によると、オンライン臨床英語コースにおける中国看護学生の学習体験：質的研究では、中国人看護師の英語学習と臨床使用の両方に適した代替手段が、中国の看護師／看護学生を支援するための最適なアプローチとなることが立証された。

Fereshteh Jalili - Grenier Rn MScN, Mackie M. Chase Med（2008）によると、英語を第二言語とする看護学生の留学継続率の関係について明らかにする中で、困難な分野や学生のニーズに関する教員と学生の認識の違いは、学生に提供されるサービスに影響を与え、ひいては学生の学習成果の低下や退学につながる可能性があることが示唆された。

野村（2014）によると、就労開始2年目のEPA介護福祉士候補者を対象とした学習支援の事例において、候補者と共に学習について考える学習相談の機会を設けることや、候補者が学習支援の協力を得やすい環境を整えることなど、候補者の自律的な学習を支援することも重要だと示された。

以上の先行研究から、学習者本人の自律的な学習を支援するためには適切な教員の指導方法が有効なアプローチであることは明らかである。

このように英語を第二言語とする看護学生への学習支援に関する研究成果の数は枚挙に暇がない。一方で日本語を第二言語とする介護福祉士を目指す留学生への国家試験対策カリキュラムについて詳細に論じられた研究成果はまだ見当たらない。

そこで本研究では、外国人の介護福祉士国家試験合格のためのカリキュラム作成と、そのカリキュラムを用いて指導を行い養成校としてより多くの外国人介護福祉士を輩出することを目的とした。ひいては介護人材不足解決への糸口となることを期待している。

2 研究方法

（1）本研究の目的

本研究では介護福祉士国家試験に向けた学習において、現状の国家試験対策を批判的思考でとらえるところから始めた。

N2未取得者であっても適切な勉強方法を指導することで、専門学校生の試験得点および合格率が向上すると仮説を立てた。実際、過去に本校を卒業した留学生の中にN2を取得していない学生も合格している。N2未取得留学生への適切な勉強方法へと導くためのカリキュラムについての検証を行う。

具体的には当校は、第1回介護福祉士国家試験以前の1988年に介護福祉学科を設置し、当時の介護福祉士養成課程のモデル校となった実績があり、実践力を意識した授業が行われている。「介護」を教えることについてはその長い歴史とともに技術の蓄積がある。それゆえに当校の日本人学生の介護福祉士国家試験の合格率は例年100%を維持している。

ところが、その教育をもってしても外国人留学生の合格率は、2023年度実績で65%であり、合格に向けた対策が必要な状況である。（図1）そこで、外国人留学生には日本人学生とは違う別のアプローチをする必要があると考えた。

特に留学生にとってハンディとなっている第二言語である「日本語」という観点と、生計を維持するために欠くことのできないアルバイトとの両立で学習時間に制約が生じているという2つの課題から、

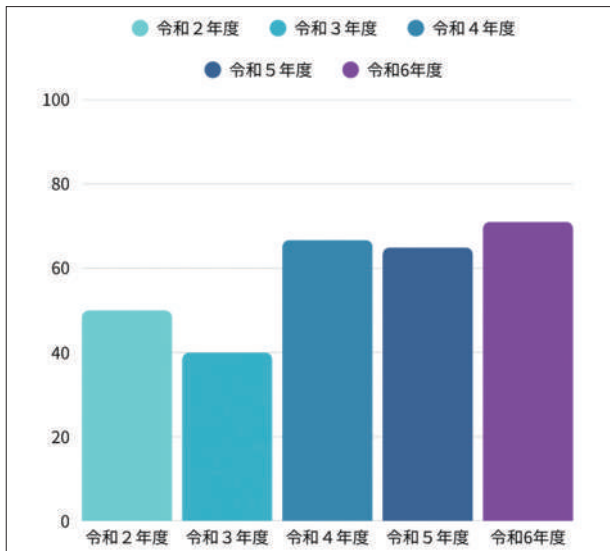


図1 当校留学生の国家試験合格率推移

学生に暗記を重視した効率のよい国家試験対策を講じ、改善点を探ることにした。

また介護福祉士国家試験の勉強に必要な日本語能力のレベルは、日本語能力試験 N2 以上であることが望ましいとされている。そのため、これに相当しない場合については、日本語能力を引き上げるための支援が必要となる。これらについては、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングを始め多数の企業や団体による先行研究結果からも明らかとなっている。また公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会が令和3年3月に出している『介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン』にも、高得点の留学生の特徴として N2以上の日本語力とある。

しかし、現在は非漢字圏学生の介護福祉士国家試験受験者が増加している。N2合格と介護福祉士国家試験合格の両方を目指すことは学生にとって精神的にも大きな負担となっている。そこで、N2合格から介護福祉士国家試験合格へと目標を切り替える最良の時期についても示唆を得る。

(2) 本研究における用語の定義づけ

本研究において下記の用語については、以下のよう

に操作的に定義する。
日本語サポートとは、当校で実施している介護の必修科目ではない、介護福祉士資格を持たない日本語教師が行う日本語教育センターのサポート授業のことである。

国試対策とは、介護福祉士国家試験合格に向けた対策授業を指す。

アウトプットとは、一般的には学習や経験を通じて得た知識や考えを、「話す」「書く」といった方法で表現することであるが、ここではそれに覚えたことを答えたり、教師に説明したり、単元テストで覚えたことを確認したりと言った学生主体の作業も含む。

QA とは、教師が質問 (Question) し、学生が答える (Answer) ことである。

暗記とは、学習を通じて得た知識を学生が説明したり、書いたりして自分に合う方法で覚え、その後忘れないようにすることである。

JLPT とは、日本語能力試験のこと。日本語を母語としない人を対象に、日本語の能力を測ることができる。国際交流基金と日本国際教育支援協会が主催し、N1から N5までの5段階のレベルで構成されている。

模擬試験とは、当校で行っている外部機関が作成している介護福祉士国家試験の模擬試験のことを指す。学生は受験料を支払い、受験。外部機関で算出された結果が届く。

知識伝達型の授業とは、アウトプットや暗記作業のない、教師が学生に知識を伝えることが中心の授業のことである。

(3) 対象者の選定方法

7月に当校で実施した介護福祉士国家試験の模擬試験で50点未満だった外国人留学生、および11月の模擬試験で7月より点数が落ちてしまった学生を対象とした。

その対象者の学生は15名であり、国籍別にみると中国2名、韓国1名と3名が漢字圏の学生であり、他12名がネパール7名、ベトナム2名、スリランカ1名、アゼルバイジャン1名、モンゴル1名と非漢字圏出身の学生であった。

(4) 調査方法

選定した留学生に対し、本研究では成果を出すために、「学生の覚えている量を増やすこと」、「覚えたことを忘れないこと」、「学生のモチベーションを維持すること」、これらを満たす授業方法をはじめに

思案した。そこで参考文献なども参考に考え出したのが下記の方法である。

介護福祉士国家試験までの4か月間(2024年10月から2015年1月)日本語サポートという補足授業内で、週2回の頻度で実施した。週2回は間隔としても空きすぎず、また多すぎて負担になる頻度でもなかったためである。シラバスについては対象者の7月の模擬試験の結果を分析し、彼らの苦手な科目から順に行い、苦手意識をとり除くことから始まり、4ヶ月後にはすべての科目がひととおり覚えられるような組み立てにした。教授法は教師の解説についてはあくまで日本語のみにとどめ、学生のアウトプットによる暗記を重視し、アクティブリコールの要素を取り入れた。

アクティブリコールというのは、勉強したことや覚えたいことを、「能動的に思い出す」こと、「記憶から引き出す」ことである。アクティブリコールの有効性については、SHANA K.CARPENTER と EDWARD L.DeLOSH (2006) によると、問題を見て答えを思い出すだけでも効果が立証されている。

さらに、齊藤と邑本(2018)によると、想起練習について、その有効性が多様な材料において確認されており、実際の教育実践においても幅広い層で有効性が確認されてきた、汎用性の高い学習方法であると述べられている。また、本研究を行うにあたり参考にした『科学的根拠に基づく最高の勉強法』によると、覚えたことを白紙に書きだしたり、練習問題を解いたり、テストを受けたりすることについて、すでに覚えたことを単に確認する作業であると勘違いしている人がいるがそうではなく思い出す作業、アウトプットすることこそが、記憶を長期に定着させる効果的な勉強法だということがわかってい

るとあった。このようにアクティブリコールの有効性を示す論文や書籍は多くある。それを参考に下記のような流れの国家試験対策授業を展開した。

すでに学生が購入していた対策本を用いて、介護福祉士国家試験に関する知識を短文レベルで理解する。介護教員ではなく日本語教員が授業を行い、介護の知識についての深い説明はせずにあくまで平易な日本語で専門用語を解説することに重点を置いた。ⁱ

そして、各自が暗記する時間をとる。ⁱⁱ その日分の理解が終わったら、QA や学生が教員への説明によるアウトプットでの理解を確認する。なお、ここで取り入れた「学生の教員への説明」というのも同著書の中では、誰かに教える、または教えようとすることで、その学習内容の理解が深まるプロテジェ効果について説明されており、学生の理解及び暗記を促進するためにこの活動を取り入れた。ⁱⁱⁱ

次の回のはじめに前回の復習としてQAで覚えた内容確認する。学生が覚えていないようであれば覚えるまでこの作業に時間をかける。そして、定期的に小テスト(図2)を実施し記憶の定着を図る。^{iv}

これらの方法については、同著書の中でも一度にまとめて勉強するより、時間を分散して勉強するほうが長期的な記憶の定着となる「間隔反復」について説明されており、アクティブリコールと組み合わせることでより高い効果が得られることが科学的にも証明されていることから、取り入れることとした。

また、狭い範囲でこまめに小テストを実施し、かつ出す問題は対策本が暗記できていれば高得点が取れる問題を当校独自で作成した。これは、学習の効果を判定するために行うというよりも、学生が高得点を取ることでモチベーションを維持し、自己効力

ブレインストーミング(brainstorming)の原則として合っているものはどれか。最も適切なものを、次のうちから1つ選んでください。

- 1 他人の意見が正しいかどうかをその場で判断する
- 2 他人の意見を参考にしてはいけない
- 3 何かしらの結論を出さなければならない
- 4 新たな意見を付け加えたり統合したりすることはしてはいけない
- 5 とにかく多くの意見を出すようにする

図2 小テストの一部

感や自信を高めることを目的とした。

(4) 評価方法

プログラムの効果を検証するため、以下の2つの方法でデータを収集した。

定量的評価においては、プログラム参加者の模擬試験（7月）と国家試験本番の得点を比較し、得点の変化を分析した。

質的評価においては、プログラム終了後、参加者に対して無記名式のアンケート調査を実施した。アンケートでは、プログラムの有効性、学習方法の変化、学習意欲などについて質問した。

(5) 分析方法

得点データについては、平均値の比較を行った。アンケートデータについては、選択式回答は単純集計を行い、自由記述回答は内容を分類し質的分析を行った。統計解析には統計解析ソフト HALBAU7を用いた。過去3年間の JLPT と介護福祉士国家試験結果について、カイ2乗検定をおこない有意水準は5%とした。

(6) 倫理的配慮

本研究は、本学の2年生を対象としたものだが、本研究への参加に関しては自由参加とし、研究者が研究概要を記した説明書をもとに口頭で説明し、本質問紙への解答を持って同意したことを確認した。なお、本研究は、学校法人敬心学園「職業研究開発センター」倫理審査委員会において承認されている。（倫理番号：敬職24-04）

3 研究結果

(1) 当校留学生の合格率は令和5年度の64%から令和6年度は7%上がり、71%になった。ここ5年間の中での最高値を記録した。（図1）

(2) 過去3年間の JLPT と介護福祉士国家試験合否結果をみると、JLPT N1保持者の合格は100%、N2は約80%、N3保持者は約46%、何も保持していない学生でも約43%合格していることが示された。

カイ2乗検定をおこない有意差が認められた。（P値>0.001）（表1）

(3) 当該アンケートをカテゴリー別（表2）に考察すると、勉強開始月については4月から始めた学生もいるが、9月、10月から始めた学生が合わせて46.7%と最も多かった。

学校外の勉強時間は、2時間が53.3%で最も多く、次いで0時間の学生も26.7%いた。

教材については、国試ナビ 33.3%、過去問題26.7%、一問一答 26.7%とこの3つが主流であった。

日本語サポートで週2回国試対策を行ったことに対する頻度については、ちょうどいいが73.3%で多数を占めた。

表1 過去3年間の JLPT 別介護福祉士国家試験合否結果

	不合格.(%)	合格.(%)	合計(%)
JLPT無し.	12(57.1)	9(42.9)	21(100.0)
N3合格.	19(54.3)	16(45.7)	35(100.0)
N2合格.	13(20.3)	51(79.7)	64(100.0)
N1合格.	0(0.0)	14(100.0)	14(100.0)
合計	44(32.8)	90(67.2)	134(100.0)

表2 アンケートのカテゴリー別結果

カテゴリー	人数(%)	割合
勉強開始月	4月 1(6.7) 5月 2(13.3) 6月 2(13.3) 7月 1(6.7) 8月 1(6.7) 9月 3(20.0) 10月 4(26.7) 11月 1(6.7)	旧卒語の先生が教える利点 勉強な言葉で説明した 3(20.0) 覚え方を説明した 3(20.0) アウトプットをした 2(13.3) なし 1(6.7) 目覚めた書き手な部分 理解する日本語力 3(20.0) 苦手な科目 2(13.3) 暗記のしやすさ 0 介護の知識 1(6.7) 2択で迷ったとき正解を選べた 4(26.7) その他 0
学校外勉強時間	0時間 4(26.7) 1時間 2(13.3) 2時間 8(53.3) 3時間 0 4時間 1(6.7)	單元ごとの5択問題リスト とても役に立った 3(20.0) 役に立った 3(20.0) 役に立たない 0 自分に合う学習方法 見つけられた 11(73.3) 以前からわかっていた 3(20.0) 長づかぬ 1(6.7)
教材	国試ナビ 5(33.3) 過去問題 4(26.7) 一問一答 4(26.7) アプリ 2(13.3)	国試ナビ合格 不合格 3(20.0) 合格 7(46.7)
日本語サポート実施	多すぎる 1(6.7) ちょうど 11(73.3) 少し少ない 1(6.7) 少なすぎる 2(13.3)	
日本語サポート効果	役に立った 10(66.7) あまり役に立たない 4(26.7) まったく役に立たない 1(6.7)	
日本語サポート問題点	なし 4(93.3)	
日本語の先生が担当したこと	1(6.7)	
国家試験に対する自信	とてもついた 4(26.7) 自信がついた 6(40.0) あまりつかなかった 3(20.0) 自信がなかった 0	

日本語サポートが役に立ったと思うかという質問には、66.7%の学生が役に立ったと答え、一番多かった。

日本語サポート内での国試対策授業の何が役に立たなかったと思うかという質問には93.3%の学生が「なし」と答えた。

日本語の先生が説明してよかった部分は、簡単なことばにして説明したことが60%と最も多く、次いで覚え方を説明したことが20%を占めた。

苦手な部分は見つけられたかという質問には、理解する日本語力と答えた学生が53.3%と半数を占め、次いで2択で迷ったときに選ぶ力と答えた人が23.3%で多かった。

単元ごとの5択確認テストについては、とても役に立ったと答えた人が60%、役に立ったと答えた人が40%で、役に立たなかったと答えた人はいなかった。

この日本語サポートの国試対策を通して自分に合う学習方法は見つけられたかという質問に「見つけられた」と答えた人が一番多く73.3%を占めた。

この対策を行い、不合格者は53%、合格者は47%であった。

(4) 7月の模試の得点平均値と国家試験の得点平均

値(表3)をみると、7月の模擬試験での得点平均値は53点であったが、国家試験の得点平均値は69点で16点上昇した。

(5) 日本語サポートの国家試験対策で役に立ったもの(図3)をみると、複数回答可であったが、特に役に立ったと選ばれた選択肢は3つあった。

先生が説明する⇒覚える⇒確認テストをすることは71.4%の学生が選択していた。語彙の説明をしたことは64.3%の学生が選択していた。毎回覚える時間があったことも64.3%の学生が選択していた。

(6) 国家試験に向けて自信がついたかどうか、自分に合う学習方法は見つかったという質問の答えと国家試験結果(表4)をみると、7人の合格者のうち6人が、自信がついた、もしくはとても自信がついたと答え、かつ自分に合う学習方法が見つかったと回答していた。

4 考察

(1) JLPT レベルと国家試験合否の相関

N2を保持していることが有利であるが、N2レベルに達していなくても合格している学生が半数弱いたことを踏まえると、適切な指導方法をとればN3以下のレベルでも合格の可能性があることが示唆さ

表3 7月中央法規模試と国家試験の平均点

変数名	標本数	平均値	分散	標準偏差	変動係数
7月模試点数	15	52.733	165.662	12.871	24.408
国家試験の点数	15	69.133	99.182	9.959	14.406

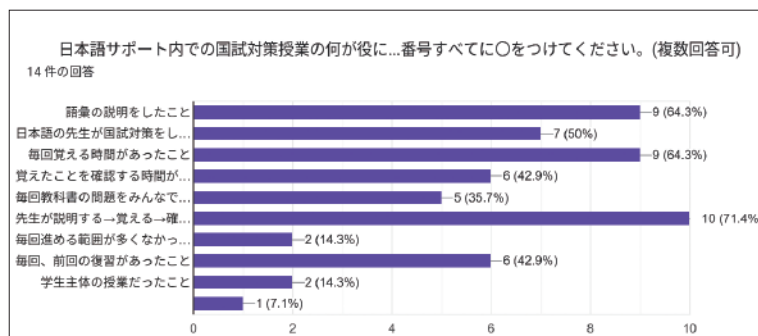


図3 日本語サポート内での国家試験対策授業で役にたった勉強法

表4 国家試験の合否と適切な学習方法の発見と自信について

国家試験に対する自信	自分に合う学習方法が見つかったか	国試合否
1 自信なし	見つからない	○
2 自信ついた	見つかった	○
3 自信なし	見つかった	×
4 自信ついた	見つかった	×
5 自信ついた	見つかった	○
6 とても自信ついた	見つかった	○
7 自信ついた	前から知っていた	×
8 自信ついた	見つかった	○
9 とても自信ついた	見つかった	○
10 とても自信ついた	見つかった	○
11 自信なし	見つかった	×
12 自信なし	見つかった	×
13 とても自信ついた	見つかった	×
14 自信ついた	前から知っていた	×
15 自信なし	前から知っていた	×

れた。当校で日本語サポートでの国試対策を始めたのは初めてではあるものの、合格者も半数弱おり、さらに得点平均値も16点近く伸びていたことから、適切な指導方法によって点数が伸びることが考えられる。

公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会が2020年度に養成校向けに行った調査では学力評価試験の養成校平均70点以上を獲得している養成校のうち7割が、入学時日本語条件を「N2以上」としているとあるが、一方で同法人の調査によると2024年度の養成施設の留学生のうち、中国・韓国・台湾のいわゆる漢字圏の学生は3054人中247人と8%のみであり、非漢字圏の留学生が実に92%と介護福祉士養成校に入学する学生の大多数を占めていると考ええるとN2保持者のみを入学条件とするのは難しい。むしろ本研究で実践したように、学生の日本語レベルに合わせて専門用語を平易な言葉で解説し、効率的な暗記方法を指導することが、より実践的な解決策となりうる。

しかしながら一概にこの方法がいいということではなく、今回対象者がネパール・ベトナム出身の学生が多かったためこの方法が効果的であったと言える。なぜならネパールやベトナムの教育文化的背景が暗記中心のものであるため、習慣化されており比較的抵抗なくできるものだったからである。

ネパールの教育については、Man B. Bhandari (2015)によると、ネパールでの教員の質の低さを指摘しており、その結果初等教育での教え方は、教科書の内容の暗記に最も重点があることを述べている。

また、山田(2014)によると、ネパールの強化学習について日本の総合学習のように原因や解決策を考えることはなく、言葉を教えることが中心と示されている。

また、ベトナムの教育についても、関口とドアン(2021)によると、ベトナムの教育の実態として教員による教科書の読み聞かせを中心とする教育実践がおこなわれてきたことが示されている。

青柳(2022)によると、ベトナムの詰め込み教育が一般的となっていることを述べている。このように学生の国籍や個人個人の特性を踏まえ指導をしていくことが有効なのである。これらを踏まえた指導をするためにも、また学生が自身の課題として「理

解するための日本語力」を挙げていることから、専門知識の学習と日本語教育を連携させるアプローチの重要性が改めて確認された。

(2) 学習方法の確立と国家試験得点の関係

本研究で日本語サポート授業開始当初はこの日本語サポートで最も学生に効果的なことは語彙の説明であろうと予想していた。しかし、結果はアクティブリコールの部分を学生が指示していた。知識伝達型の授業ではなく、学習方法の指導及び学生主体の授業が学生の国家試験対策において重要な役割を果たす可能性が示唆された。

本研究は留学生にとって「わかりやすい覚え方の説明」、そして「その場で覚える」ことの重要性に着目し焦点を当てた。留学生は生活維持のためアルバイトしている学生がほとんどであり、受験前にアルバイトを減らすことは難しいからである。

その留学生の限られた時間の中で、日本語サポートではアクティブリコールの要素を取り入れ短期間で暗記できるようサポートを行った。その結果、それらの方法が効果的であると立証された。暗記方法については、日本人向けにも暗記術や暗記のコツを述べている書籍が多数あるが、その中でも留学生に適している「覚えなければならないことが多すぎるのに、時間が足りない」人向けの要領よく暗記をする「試験に合格できる」暗記術であるアクティブリコールに着目し取り入れた。

鬼頭の「資格試験に難しくても一発合格！超高速暗記術」の「受かる人は翌日に復習する、受かる人は参考書を使い倒す、受かる人はインプットが1、アウトプットが3、受かる人は暗記を習慣にしている」や、NAITEIBRIDGEの「毎日定量のインプット学習（自習）と並行して、アウトプットをさせる」などの書籍にあるように、1冊の参考書を使い、アウトプットを中心とした授業を展開した。

本研究の結果では、教材についてはほとんどの学生が学校で配布された教材を使用して勉強しており、自分で他の教材を購入したと答えた学生はいなかった。多くの参考書をこなすことよりもどれか自分に合う教材をしっかりと覚えることが合格につながることが考えられる。

また日本語サポートの国家試験対策で役に立った

と答えたものも、覚える時間があったこと、説明➡覚える➡確認テストで覚えられたか確認と暗記に関するものの評価が高かったことから、学生の主体的な授業や確認テストの取り組みが成果に寄与しており、暗記の対策授業の効果がうかがえた。

(3) 日本語サポートでの対策授業や確認テストの効果

ほとんどの学生が日本語サポートでの国家試験対策授業を役に立ったと答えたこと、半数以上の学生が、日本語教師が簡単なことばで説明したことをよかったと答えたことから、他研究でも立証されているように専門知識と語学力は深く関係があり連携していくことで効果が得られることがわかった。

介養協のガイドラインでは漢字語彙の捉え方や長い漢字の言葉の捉え方の説明の仕方が載っているがあくまで一例であり、その都度学生個人個人のレベルに合わせ、語彙をコントロールし説明することは容易なことではない。そこでその説明が本業である日本語教師が「語彙の説明」というところに特化し専門教育との連携を図ることで学生の伸びを促進させることが考えられる。

(4) 学習の自信と国家試験得点の関連

学習の自信と成績の関連についてはこれまでも多数研究がなされている。

例えば、安川（2024）によると、『科学的根拠に基づく最高の勉強法』でも、カナダの心理学者バンデューラによって提唱された自己効力感理論（Self-Efficacy Theory）の有効性が示されている。自己効力感とは、ある目的を達成するために必要な行動を、自分がどの程度うまく行うことができるかという個人の確信の程度で、「自分にはこれができる」という感覚のことを指し、これが高いと、学習のモチベーションが高く、学習の粘り強さや高い学業成果につながると書かれている。

木村ら（2012）によると、長崎大学における入学前教育の枠組みと効果測定においても、自己効力感の高い学生ほど入学前の通信添削課題の点数が高かったと証明されている。

では学生はいかにして自信をつけるのか。それには学生にいかにより自信をつけさせる指導を行うかが重要であり、それについても様々な論文で述べられて

いる。

守岡（2023）によると、救急救命士養成課程の学生はいかにして国家試験を乗り切るのか＝グループ学習により学習動機付けの促進において、学生が内発的動機付けにより自発的に勉強するためには3か月以上の期間が必要であり、自己効力感などの上昇には6ヶ月程度の期間が必要であることが明らかになっている。

大内・岩田・山崎（2014）によると、国家試験合格に向けた自己理解と学習動機の関係性の検討において、国家試験での合格を目指すための指導において、学習内容の重要性に関わる学習動機を向上させるような介入の必要性が示唆されている。

このようにある一定期間、適切な学習方法の指導を行うことが学生の自信につながり成績向上に効果的であることは証明されており、本研究の調査でも半年間の日本語サポートにおける国試対策の授業で、合格者7人中6人が自信をもったと答えており、適切な学習方法の指導が学生への動機づけ及び自信獲得につながると考察できる。

5 今後の課題

本研究は、一教育機関における少数事例を対象としたものであり、結果の一般化には慎重を期す必要がある。また、対照群を設定していないため、得点の上昇が本プログラムのみの効果であると断定することはできない。今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

- (1) より多様な背景を持つ留学生を対象とした、大規模な追跡調査を行う。
- (2) 対照群を設定した、より厳密な効果測定をする。
- (3) 学生の学習プロセス（例：どの部分の暗記に時間がかかったか、どのようなアウトプットが最も効果的だったか）に関する、より詳細な質的分析を行う。

これらの研究を重ねることで、外国人介護福祉士を育成するための、より効果的で標準化された教育カリキュラムの開発に貢献できると考えられる。

また今後の介護業界において、外国人の介護福祉士養成は避けて通れないものである。本当の介護福祉士とは介護福祉士国家試験に合格すればなれるも

のではない。介護福祉士の理論・技術を身に着けることが必要である。

そのためにも、通常の授業においては外国人のハンディである日本語に対するフォローをしつつ、日本人学生と同様の理論・技術を指導していかなければならない。

それを実現するには日本語教育と連携し、かつ国家試験対策においても、文化的背景を踏まえ各国に合わせた効率的な外国人留学生に合う方法を取り入れていくことが近道となる。日本語教育との連携についてはまだまだ研究を重ねていく必要がある。

6 謝辞

今回の研究にあたり、授業を行ってくださった日本語サポートの先生方に深く感謝いたします。

また、本論文の校正に協力いただきました杏林大学小堀貴亮教授にも心より感謝申し上げます。

注

i 短文レベルで理解の例

「ブレインストーミング (brainstorming) の原則では、他人の意見が正しいかどうかをその場で判断する」という短文について学生が知らない可能性の高い「判断」という語彙について決めることであると簡単に説明し、○か×かを考えさせる。

ii 具体的な答えの暗記方法とその例

次に正しい答えを理解させる。本来の説明文では「ブレインストーミングは、結論を出すことが目的ではなく、多くの意見を出すことが目的である。他人の意見については、否定や批判を行わず、参考にして発展させる。」となっているが、この一文を覚えることは学生にとってかなりの負担である。そこで「結論は出さない＝判断しない」「多くの意見」「否定・批判しない」「参考にする」この4つの部分を暗記させる。

iii アウトプットによる理解確認とその例

覚えられているようであれば、プロテジェ効果を狙い学生に覚えた4つのキーワードでブレインストーミングについて説明させ、理解を深める。覚えられていないようであれば、まずは「結論は出すか、出さないか」と2択から始め、「何をしないほうがいいか」と徐々にオープンクエッションにしていき、暗記を促す。

iv 小テストでの暗記確認方法

次の回で、これを国家試験同様の5択に直した問題で学生が暗記できているかを確認する。(図2) ここでは「てはいけない」「なければならない」など文末表現で肯定なのか否定なのかの確認も行うことも重視し学生の間違いやすい日本語表現に注意を向けさせることも練習する。

引用文献

- 1) 青柳 文男 (2022) 「ベトナムの教育事情 ― 教育制度から日本語教育まで ―」『東京学芸大学リポジトリ』137-140頁
- 2) 大内 義広、岩田 泉、山崎 香保里 (2014) 「国家試験合格に向けた自己理解と学習動機の関係性の検討」『城西国際大学紀要』第22巻 第3号85-98頁
- 3) 大谷 晋也 (2019) 「EPA 看護師候補者のためのオンライン漢字語彙教材の開発」『科学研究費助成事業 研究成果報告書』
- 4) 鬼頭 政人 (2024) 『資格試験に難しくても一発合格！超高速暗記術』118-122頁、131-135頁、146-149頁、158-162頁、大和書房
- 5) 木村 拓也、池田 光壱、西原 俊明、大橋 絵理、田山 淳、竹内 一真、井ノ上 憲司、山口 恭弘 (2012) 「長崎大学における入学前教育の枠組みと効果測定」『大学入試研究ジャーナル』22巻、95-104頁
- 6) 学校法人 敬心学園 日本福祉教育専門学校 (2025) 「SCHOOL GUIDE 2026」19-20頁
- 7) 黄 海洪、金丸 敏幸 (2023) 「介護分野における専門用語の平易化に向けた語彙リストの構築」『言語資源ワークショップ発表論文集』巻1、26-39頁
- 8) 厚生労働省 (2025) 「第37回 介護福祉士国家試験 合格発表について」https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_54923.html
- 9) 厚生労働省社会・援護局長 (2025) 「介護福祉士国家試験におけるパート合格（合格パートの受験免除）の導入について（通知文）」
- 10) 公益社団法人 日本介護福祉士会 (2024年) 「在留資格「介護」の実態把握等に関する調査研究事業」1頁
- 11) 公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会 (2022) 「介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン」5頁
- 12) 齋藤 玲、邑本 俊亮 (2018) 「学習リテラシー ― 学習方法としての想起練習に着目して ―」『The Science of Reading』Vol. 60. No. 4 205頁
- 13) 関口 洋平、ドアン グットリン (2021) 「ベトナム中等教育改革における授業研究の位置づけ ― 統合的な学習への転換という視点から ―」『国際教育協力論集』第24巻 第1号 77-95頁
- 14) NAITEIBRIDGE コラム (2021) 「外国人スタッフの漢字学習を社内で支援するための4ステップ」https://naiteibridge.com/kanji_method/
- 15) 野村 愛 (2014) 「就労開始2年目のEPA 介護福祉士候補者を対象とした学習支援の事例」『専門日本語教育研究』16巻、79-84頁
- 16) Phan Thi My Loan、佐々木 良造、比留間 洋一、道上 史絵 (2023) 「介護福祉士国家試験出現漢字語彙のなかの漢越語に関する基礎調査」『外国語教育のフロンティア』6、91-105頁
- 17) 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング (2023年) 「外国人介護人材の介護福祉士取得に向けた調査研究事業」
- 18) 守岡 大吾 (2023) 「救急救命士養成課程の学生はいかに

- して国家試験を乗り切るのか＝グループ学習により学習
動機付けの促進」『明治国際医療大学誌 (30)』、39-40頁
- 19) 安川 康介 (2024)『科学的根拠に基づく最高の勉強法』
48-51頁、65頁、78-81頁、82-83頁、161-163頁、株式会社
KADOKAWA
- 20) 山田 隆幸 (2014)「ネパールの教育・保育の現状と課
題－カースト制度、女性差別、貧困とたたかうネパール
民衆－」『子ども学研究論集』号 3、39-58頁
- 21) Amanda Muller (2011) “Addressing the English language
needs of international nursing students”: Special Issue:
Proceedings of the 10th Biennial Conference of the Association
of Academic Language and Learning Vol. 5 No. 2 (2011)
Australia
- 22) Amanda Muller & Michael Daller (2018) “Predicting
international students' clinical and academic grades using two
language tests (IELTS and C-test): A correlational research
study” Nurse Education Today Volume 72, Pages 6-11
Australia
- 23) Anson C.Y. Tang, Nick Wong, & Thomas K.S. Wong (2015)
“Learning experience of Chinese nursing students in an online
clinical English course: Qualitative study” Nurse Education
Today Volume 35, Issue 2, Pages e61-e66 America
- 24) Ellen M. Gajewski (2021) “English language proficiency
admission requirements of domestic English as a second
language students and performance in a nursing program”
Journal of Professional Nursing Volume 38, January–February
2022, Pages 104-113 America
- 25) Fereshteh Jalili – Grenier Rn MScN, & Mackie M. Chase Med
(1997) “Retention of nursing students with English as a second
language” J Adv Nurs First published: 28(1) Pages 199-203
Canada
- 26) Man B. Bhandari (2015) “Challenges of Education in Nepal
post 2015 Oslo and Akershus University College of Applied
Sciences, Multicultural and international education.
- 27) Olson, Mary Angela (2012) “ENGLISH AS A SECOND
LANGUAGE (ESL) NURSING STUDENT SUCCESS: A
CRITICAL REVIEW OF THE LITERATURE” Journal of
Cultural Diversity 19(1): Pages 26-32 Australia
- 28) Richard L. Light, Ming Xu, & Jonathan Mossop (1987)
“English Proficiency and Academic Performance of international
Students” TESOL Quarterly Vol. 21, No. 2, pages 251-261
America
- 29) SHANA K. CARPENTER and EDWARD L. DeLOSH (2006)
“Impoverished cue support enhances subsequent retention:
Support for the elaborative retrieval explanation of the testing
effect” Memory & Cognition 34(2), 268-276
- 30) Yenna Salamonson, Bronwyn Everett, Jane Koch, Sharon
Andrew, & Patricia M. Davidson (2007) “English-language
acculturation predicts academic performance in nursing students
who speak English as a second language” Res NursHealth
Volume 31, Issue 1 Pages 86-94 Australia

受付日：2025年9月8日

受理日：2025年11月6日

アンケート

留学生に向けた介護福祉士国家試験対策授業に関する依頼書アンケート

問1 7月の介護福祉士国家試験模擬試験での点数を覚えている範囲で教えて下さい。

(点)

問2 7月の時点では国家試験合格に対する自信はどの程度でしたか。最も当てはまる番号に○をつけてください。

1. とても自信があった
2. 自信があった
3. あまり自信がなかった
4. まったく自信がなかった

問3 学校の授業以外で国家試験の勉強を始めたのは何月ぐらいからですか。

(月)

問4 学校の授業以外にうちで、毎日どのくらい勉強していましたか。

(平均 時間)

問5 国家試験の勉強で最も役に立ったと思う教材は何ですか。最も当てはまる番号に○をつけてください。

1. 『介護福祉士国家試験一問一答ポケットブック2025』 中央法規出版株式会社
2. 『見て覚える！介護福祉士国家試験国試ナビ2025』 中央法規出版株式会社
3. 『2025年版介護福祉士 2025徹底予想模試』 株式会社 ユーキャン
4. 『介護福祉士国家試験問題解説2025』 メディックメディア
5. 『2025年度版介護福祉士 完全合格過去&模擬問題集』 TAC 出版
6. 介護福祉士国家試験 過去問題
7. 介護福祉士過去問試験徹底対策アプリ Grune 株式会社
8. 介護も学べるにほんごを学ぼう (Web サイト) 公益社団法人日本介護福祉士会
9. その他 ()

問6 10月から週1回もしくは2回、日本語サポート内において国試対策を実施してきました。その頻度についてどう思いましたか。最も当てはまる番号に○をつけてください

1. 多すぎる
2. ちょうどいい
3. 少し少ない
4. 少なすぎるのでもっとやったほうがよかった

問7 日本語サポート内における国試対策の授業内容についてどう思いましたか。最も当てはまる番号に○をつけてください。

1. とても役に立った
2. 役に立った
3. あまり役に立たなかった
4. まったく役に立たなかった

問8 (問3で1もしくは2を選んだ人への質問) 日本語サポート内での国試対策授業の何が役に立ったと思いますか。当てはまる番号すべてに○をつけてください。(複数回答可)

1. 語彙の説明をしたこと
2. 日本語の先生が国試対策をしたこと
3. 毎回覚える時間があったこと
4. 覚えたことを確認する時間があったこと
5. 毎回教科書の問題をみんなで解いたこと
6. 先生が説明する→覚える→確認すると同じパターンで授業が進んだこと
7. 毎回進める範囲が多くなかったこと
8. 毎回、前回の復習があったこと
9. 学生主体の授業だったこと
10. その他 ()

問9 (問3で3～5を選んだ人への質問) 日本語サポート内での国試対策授業の何が役に立たなかったと思いますか。最も当てはまる番号に○をつけてください。

1. 日本語の先生がやったこと
2. 暗記中心だったこと
3. 毎回同じパターンだったこと
4. 進む範囲が多かったこと
5. その他 ()

問10 日本語サポート内での国家試験対策授業で、日本語の先生が説明してよかった部分は何だと思いますか。最も当てはまる番号に○をつけてください。

1. 難しい専門用語を簡単なことばにしたこと
2. 覚え方を説明したこと
3. 覚えたことを(介護を知らない)日本語の先生に説明したこと
4. 特になし
5. その他 ()

問11 日本語サポート内での国家試験対策授業を受ける中で、自分の苦手な部分は見つけられましたか。
最も当てはまる番号に○をつけてください。

1. 問題を読んで理解する日本語力
2. 苦手な科目（分野）
3. 暗記の仕方
4. 介護の知識
5. 2択で迷ったときに正答を選ぶ力
6. その他（ ）

問12 日本語サポート内の対策授業では、暗記できていたかどうか確認するため、单元ごと（範囲の広い单元は2回に分けて実施）に10問～15問の国家試験と同じ5択の確認テストを行っていました。そのテストについてはどう思いますか。最も当てはまる番号に○をつけてください。

1. とても役に立った
2. 役に立った
3. どちらでもない
4. あまり役に立たなかった
5. まったく役に立たなかった

問13 （問6で1もしくは2を選んだ人への質問）確認テストのどんなところが役に立ったと思いますか。当てはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 单元ごとにテストがあったこと
2. 国家試験と同じ5択になっていたこと
3. 適度な難易度だったこと
4. 実際の国家試験でもでた問題がでてきたこと
5. その他（ ）

問14 （問6で3～5を選んだ人への質問）確認テストが役に立たなかったと思う理由は何ですか。最も当てはまる番号1つに○をつけてください。

1. 国家試験ではでないような問題ばかりだったから
2. 覚えなくてもいいような問題が多かったから
3. なくても点数は取れたと思うから
4. 点数が低いとモチベーションが低くなったから
5. その他（ ）

